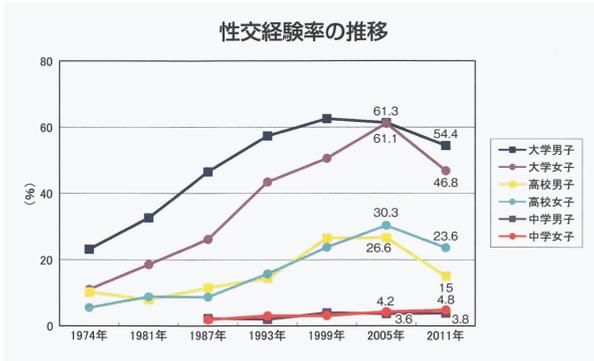


- ・若者の性行動の行方は如何に
今「消極化」の流れにあって
- ・母になるまでの長い道のり
- ・エベレスト街道を旅して

若者の性行動の行方は如何に・・・今「消極化」の流れにあって

村口きよ女性クリニック院長 村口喜代



資料：日本性教育協
「青少年の性行動 わが国の中学生・高校生・大学生に関する第7回調査報告」

本調査は1974年から6年間隔で継続調査されてきた。今回は2011年の調査結果の報告であり「青少年の性行動の日常化と分極化」というタイトルだった。5人の講演者の話を聞いた後で、強く印象づけられたこと、それはこれまで積極的だった層も含めて全般的に消極化の流れにあるということだった。

性交経験率は、1974年以降増加の一途を辿っていたが、1999年以降は停滞しており、性行動の活発化に歯止めがかかり、2011年には大学生、高校生の性交経験率は大幅に低下した。特に大学女子と高校男子の低下が顕著である。「性」はもはや特別視したり、隠ぺいする必要のない経験として「青少年の日常生活の中に組み込まれつつあり」、性が「特別なもの」ではなくなったから関心も低下するという性行動の日常化が生じているという。

「消極化」の背景は何か。若者たちは、自分自身の選択がもたらすポジティブな結果についてではなく、自分自身の選択が将来引き起こすかもしれないネガティブな結果については、より敏感に反応するようになりつつあり、今まさに「欲望の時代」から「リスクの時代」へ変わりつつあるという。社会的・道徳的規範が個人の生き方を制限していた時代から、性の自由化が進み、個人の生き方の選択可能性が大幅に広がり、多数の選択肢が用意され、自分自身の選択の結果を自分で受け止めなければならない時代となった。恋愛や性行動をめぐる若者たちのリスク化（・消極化）は、戦後の日本社会で進展してきた「性の日常化」の帰結として理解することができるという。

また一方、（社会全般に蔓延してきた不景気・就職難・若者の非正規就業者の増加などのためであろうか）高校生・大学生にとって学校・学業の位置づけが相対的に高まった結果であり、今日の勉学志向は止むを得ずであり、真に学業意識が高まった結果ではない。今後は一層の消極化が進行するというよりも、その時々社会・経済情勢の影響を受けながら、積極化する局面とを繰り返していくのではないだろうかという。

今日、性行動の形はいつそう多チャンネル化した。「一人のセックス」も「二人でのセックス」同様に価値があるとの認識が進みつつあり、またそれをサポートするさまざまなアイテムもIT社会の繁栄とともに進化・更新され続けている。男女のセックスは男女の関係性・コミュニケーション力に関わるだけに容易なことではない。一方で性産業の繁栄もすさまじい。本当に「セックス」は今まさに受難の時代にある。

若者に限らず、老若男女、幸せへの道のり・セクシュアリティは、いまだ道半ばなのかもと、しみじみ思う今日このごろである。

母になるまでの長い道のり



昨年末、元気な男の子を出産しました。それは私にとっても特別な体験で、まさに自分が女性であり、新しい命を育む性であるということを実感した時間でした。

出産までの経過は長く、妊娠することの難しさを知ることからのスタートでした。20代前半から無月経気味だった私は、32歳で結婚した時から「きちんと自分の体調を整えなければ妊娠は難しいだろう」と、基本的な食生活を見直し苦手だった運動にも取り組み始めました。しかし、もともと体質と長期の不摂生生活が響いていたのか、基礎体温は2相性にならず、排卵もままならない状態が数年続きました。「自分は妊娠できないのではないか」と落ち込むこともありましたが、きっと努力は実るはずだと体温を上げる方法を試したり、自律神経のバランスを整え骨盤内の血流をよくする治療を受けたり前向きに過ごしていました。

そしてついに、めでたく妊娠することができました。しかし喜んだのも束の間、妊娠7-8週目で流産となってしまいました。…それでもなぜか、自分でも流産するような気がしていたのであまり落胆せず、「私もようやく妊娠できる体になった」とむしろ安堵していました。それから気持ちは前に進み、2ヶ月後に人工授精を試みて、幸運なことにすぐ妊娠することができました。

妊娠してからは、どうしてもない程の睡魔に襲われ、それまでの体とは全く別物になり、私の体全てが新しい命を育てることに集中しているようでした。女性ホルモンの威力を実感した日々です。その後も、切迫流産での入退院、自宅安静、切迫早産での再入退院、肝機能障害と続き、今までの自由な生活から、赤ちゃんが無事に成長してくれることに集中した安静生活に激変しました。心は変わらず元気ですし、妊娠中にやりたかったこともたくさんあったので、動かずに過ごすことはなかなか難しく苦労しました。入院中は増量していく早産予防の点滴の副作用で辛く感じつつも、日に日に大きくなるお腹を見たり、によるよるモコモコとした胎動を感じたりする度、自分の中で力強く新しい命が育っていることを感じ元気が湧いてきました。入院環境にも恵まれ、職場、友人、家族、病院のスタッフみなさんのサポートをたくさん頂き、その後なんとか無事に出産することができました。

産んだ時は感動よりも「痛かった。そしてここまで長かった…」が一番の感想でした。今は可愛い我が子との新しい生活が始まり、生活の軸は完全に子どもへ移り、長時間の抱っこや授乳で体は疲労していますし、親のサポートのない私たち夫婦としては今後の働き方や家族計画についてなど考えることも多々あります。それでも、赤ちゃんは想像以上に可愛くていろいろな表情や毎日のめざましい成長を見ているだけで、「産まれてきてくれて良かった。ありがとう」と心から愛おしく感じる毎日です。これまで見えてなかったことにも視野が広がりました。こんなにも妊娠・出産が大変なものだとは思いませんでしたが、喜びはそれ以上で、経験できて本当に良かったです！周りからは「育児はもっと大変よ」と言われているので、これからも楽しみながら頑張っていこうと思います。

エベレスト街道への旅 ～高山病と戦いつつ得た感動の時に～ 仙台市立病院名誉院長 東岩井 久 先生

エベレスト街道のトレッキング（平成25年2月21日～3月3日）に行ってみないかというお誘いがあった。一般の旅行会社では70才を超えた人の参加は受け付けないという話を聞いていたので、体力に不安はあったが、同行する人が昔モンブランやドロミテ、アイガー等のヨーロッパアルプスのトレッキングの仲間だということで、憧れのエベレストを見る機会はこれしかないと思い、渡りに船と参加する事にした。

参加者は総勢10名、殆どは絵を書く人や写真を撮る人で、単純にエベレストをこの目で見たいというのは私一人だった。77才の私を筆頭に平均年齢が70才を超える高齢集団を世話してくれたのはサーダーを筆頭にシェルバ2名、料理長1名、コック2名、荷物や食料を運ぶ4頭のゾッキョ（ヤクとウシの雑種）を追う若者1名という7名の人達だった。

バンコック、カトマンズを経由し世界で着陸の最も難しいと言われる滑走路が400mしかないルクラの飛行場（2,840m）に到着した。ここから目的地のエベレストビューホテル（3,880m）まで、往復シェルバ族の生活道路を歩いた事になるが、最も過酷なトレッキングコースと言われるだけに生易しいものではなかった。井上 靖著「ヒマラヤの月」の中で宿泊施設も無く、ナムチェまでは露営を重ねこの街道を進んだとあったが、現在では大きな部落にはロッジが建てられており文明の波がシェルバ族の住む村々にまで及んでいた。

ヒマラヤから流れるドウトコシの流れに沿ってタルシン（魔除け）の結ばれた多くの吊り橋を渡り、ラマ教の経文が彫られたチオルテンの傍らを通り、ナムチェに達する急坂を上りエベレスト・シェルバリゾートに到着した。途中、高度3,000m頃から突然高山病に襲われ、戦いながら、息も絶え絶えに、7kg痩せて、何とか辿り着いた。見上げたエベレストを囲むヒマラヤの高峰・・・、その時の感激を伝えるのはとても難しい。ローツエの上に聳える夕焼けに染まったエベレスト、満天の星空の下に雪をいただいて立つコンデリの連山、アマダブラム等の6,000mを超えるヒマラヤの姿はいつまでも脳裏に残る事と思う。また機会があればマナスルやアンナプルナ等のネパール西方の世界の屋根を目にしたいものである。



タルシンを背に仲間たちと

臨時休診

○ 5月2日（木）～9日（木）はゴールデンウィークの臨時休診となります。

発行元：村口きよ女性クリニック

<http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp>

e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp

